最高学部（大学部）

楽しみつつ全力で社会へ働きかけた１年間

学部長補佐　遠藤 敏喜

2023 年度は、コロナ禍で数年来制限を余儀なくされていた教育・研究活動が完全に再開した 1 年間であった。とりわけ夏季休暇中に世界体操祭へ参加したメンバーは、日々の主体的な練習と現地からの喜びに満ちた報告を通して、最高学部全体に活気を与えた。コロナ渦にも粛々とインターン活動を重ねた学部生はいよいよベンチャー企業を立ち上げて、ひとつの大きな成果を結実させた。その他、2023 年度の教育・研究活動を可能な限り網羅的にお伝えする。本稿が最高学部と読者との共創の一助となれば幸いである。なお本文では、誤解のない範囲で、最高学部を単に学部と記す。

1.自由学園の大学

本章の内容は前号の拙稿(遠藤 2023)とほぼ同じ内容であるが、自己完結も兼ねて、一部更新して再掲する。

自由学園の大学である最高学部は、独自の構想によって 1949 年に設立された(羽仁 1950)。以来、大学設置基準によらず、キリスト教精神ならびに一貫教育での学問と生活の実践を通して、社会における優れた生活者・形成者を輩出してきた。卒業生は延べ人数5、500 名と極めて少ないが、一人ひとりが使命をもって活躍している。自由学園ウェブサイト「100 人の卒業生プラス」をご覧いただきたい。

自由学園はその一貫教育を通して「真の自由人になる」ことを創立時からの伝統として標榜し、最高学部は、よい専門家であるためによい人間となるべく、リベラルアーツ教育を実施している(自由学園総合企画室 2010)。1999 年にそれまでの男子学部・女子学部体制を 4 年課程・2 年課程に改組した後は、 とくにリベラルアーツ教育から育まれる研究活動・社会活動にも力を注いでいる。自由学園の自由は、ヨハネ福音書 8 章 32 節「真理はあなたたちを自由にする」から取られているが、「自由人」は「与えられたいのちを自由に向けて経営してゆく人」と言い換えられる。

最高学部は、創部以来、自由学園高等科修了を入学要件としてきたが、自由学園の創立 100 周年を機とする 2024 年度からの中等部・高等部の男女共修を伴う共生共学の学校改革に呼応して、最高学部からの入学生徒募集を決定した。また、2024 年度入学生から、専願を要件としない内部進学試験を、高等部修了後に追加募集として実施し、1 名の合格者を出した。これまで、学部で学ぶことを最優先とする意志を確認し、教育の一貫性・同質性を重視することで成果を出してきた。今後も自由学園で学びたいというこの意志を最も重要と考える立場に変わりはないが、しかし同時に現在の、複雑化し多様な人が共に生きる社会の変化を背景に、学部が様々な背景を持った学生が共に学ぶ場となることが重要であると考え、今後、自由学園高等部以外の生徒へも門戸を開く次第である。

2.学生数・教員数などの状況

2023 年 4 月時点での在籍学部生は 86 名であった。ここ数年微減が続いている。退学者は、9 月と年度末の各 1 名ずつで、理由はそれぞれ韓国留学と保育・幼児教育の資格習得のためである。新しい場所でも活躍することを祈る。

学部本務教職員は、2022 年度から 2023 年度にかけて、変更はなかった。再掲となるが、学部長は学園長と兼務で高橋和也、副学部長は神明久と咲花昭嗣で、本年度も昨年度に引き続き学部長補佐職をおき、筆者が担った。本務教職員数は私たちを含めて 14 名(うち 1 名は育児休業継続)で、非常勤講師・職員は、おおむね 45 名であった。

3.事業の概要(教育と研究)

3.1.キリスト教精神に根ざした人間教育

自由をテーマとする2年生必修講義「自由学原論」は、今年度も宗教主事の後藤田典子先生にご登壇いただいた。今年度で退職される後藤田先生には卒業前の夕礼拝と年度末の学部修業式の礼拝でもご講話いただいた。後藤田先生は、学部生に分かりやすく例示的に、神の愛を説いて

くださった。

高橋和也学部長の発案で、卒業生(2 年課程 6 名と 4 年課程 27 名)全員に、卒業に際して心に残る聖句とそれに対する思いを述べてもらい、さらに思い出の写真もそれぞれに添えてもらって、小冊子『心に残る聖書の言葉』(A5 版 40 ページ)を綴った。冊子は学部長の手作りで、卒業生全員へと贈られた。

3.2.一人ひとりのケアと尊重

1999 年の新体制以降、学部生の個人成績表には、学業成績のみならず、卒業研究テーマ・ギャップイヤーや学外研修の内容・期間といった正課プログラムの特記事項と、生活教育カリキュラムや正課外活動などの特記事項も、網羅的に掲載してきたが、これらは教務事務の管理のもと、クラス担任をはじめとする学部本務教職員のリレー形式で記録していた。これを本年度から学園全体に導入されたフルクラウド統合型校務支援システム BLEND を活用することで、IoT データ形式として正規化させ、多様で特有のカリキュラムを体系化した。学部生は日常的に個別ポートフォリオを閲覧できるようにもなった。

3.3.学習する学校・生活即探求

9 月 9 日に第 6 回自由学園リベラルアーツ学会を開催した。本務教員から小堺康弘准教授、奈良忠寿准教授、遠藤敏喜教授の 3 名と、前リビングアカデミーリーダー中村祐二先生、卒業生眞保裕稀乃氏、二井彬緒氏(東大助教)による講演があった。発表内容は学園新聞 738 号の記事(山田 2023)に詳しい。

最高学部と資料室の共同で発行している査読付研究誌『生活大学研究』は今年度第 9 巻1号を刊行した。原著論文 1 本、寄稿 2 本、ニュース 3 本を掲載したが、今年度は例年に比べて投稿論文が少なかった。本研究誌はオープンジャーナルであり、国立研究開発法人科学技術振興機構が運営する電子ジャーナルプラットフォーム J-stage (https://www.jstage.jst.go.jp/) からどなたでも閲覧できる。

学部生の研究にも目を見張るものが多数あった。今年度 4 年課程卒業研究は、27 名から単著 19 本、2 人による共著 1 本、6 人による共著 1 本の計 21 本の論文が提出され、すべて合格であったが、主任会議では次の論文がとくに高い評価を得た;「近代公娼制と廃娼運動の遷移ー売春はなぜ違法化されたのか」、「最高学部生と卒業生をつなぐ Web アプリ「Relinko」の開発」、「竹繊維束を用いた繊維強化プラスチックの作製とその応用」、「首都圏郊外住宅地の地域活性化に関する研究ーコミュニティデザインを中心に」。2 年課程卒業勉強は、6 人全員による共著論文「女子部・男子部の生活教育への提案ー食教育・懇談・平和教育を中心に」が提出され、これも高い評価を得た。

研究活動は学外で積極的に発表された。領域横断研究:フィールドサイエンスゼミの教員と学生は、2 年連続で日本森林学会にて、東久留米市におけるブナ科樹木萎凋病(通称ナラ枯れ)の発生と予防の取組みについて、向山緑地公園などで取り組んだ内容を発表した。6 月 24 日に北海道大学で開催された土木学会では、吉川慎平准教授が「矢作川・明治用水頭首工漏洩事故に伴い確認された旧頭首工遺構の残存状況と河道特性」と題する口頭発表を行い、講演論文は同学会の専門誌に掲載された。9 月 14 日に広島大学で開催された土木学会ならびに 2024 年 3 月 6 日に九州大学で開催された日本水環境学会年会では、吉川慎平准教授・小田幸子准教授と学生の連名で「河川水中の溶存イオン濃度が低値を示す矢作川流域における追跡調査」を発表した。SDGs でも掲げられている「海域の豊かさ」と「陸域の豊かさ」をつなぐ「水の循環」に関するテーマであった。

研究活動と関連して、「都市環境工学」受講生の 3 名が 2 級ビオトープ計画管理士認定試験にチャレンジし、3 名とも合格した。ビオトープとは地域の野生動植物が生息する空間のことで、ビオトープ管理士とはビオトープの価値を高め持続可能な社会の構築に寄与する者をいう。3 名は「さらに関連する資格も取得したい」「勉強したことや資格を足がかりに、今後の環境保全や改善に活かしたい」(吉川 2024)と頼もしい。

東久留米市教育委員会主催の市民大学講座では、10 月 18 日に室永優子准教授が登壇し、「源氏物語に見る日本の色の文化史」と題して講演した。詳細は年報本号の室永自身による記事を参照されたい。

3.4.よりよい社会のためのモデルとして

オランダのアムステルダムにて 2023 年 7 月 30 日から 8 月 5 日まで開催された世界体操祭に、学部生 23 名が出場して演技発表を行った。メンバーは春休みからおおよそ4か月間ほど練習を重ね、友の会大会(5 月 17 日)、協力会総会(6 月 3 日)、学部保護者会(6 月 10 日)、中等部・高等

部(7 月 12 日)、と学園内で 4 回ほど演技披露をして、本番に挑んだ。オランダでは 3 回のグループパフォーマンスを披露し、ワールドチームの演技にも 2 回参加した。世界体操祭後も、10 月 7 日の体操会で世界体操祭のパフォーマンスを披露し、11 月 24 日には日本体育大学体操部の演技発表会にもゲストチームとして招待された。メンバーはいずれの場でも、自由学園が長い年月をかけて作りあげた体操文化を実に生き生きと表現した。学部は、世界体操祭メンバーのおかげで、活気に満ち溢れた 1 年間であった。世界体操祭に関する詳細は年報本号の早野曜子准教授による記事を参照されたい。なお早野曜子は、9 月 10 日に駿河台大学で開催された日本体操学会にて、世界体操会を題材にポスター発表(大会参加前後の意識変化)と口頭発表(日本におけるデンマーク体操の普及と変遷)の 2 つの研究発表を、玉川大学と神村学園との共同で行った。

体操会における学部全員体操の1年生チームは、11 月 23 日に国立代々木競技場で開催された日本体操祭へ出場した。学部は 1999 年から継続して出場しており、世界体操祭への参加もこの貢献によるものである。

1990 年より毎夏学部で実施していたネパールワークキャンプは、コロナ禍で 3 年ほど活動を休止せざるをえなかったが、今夏 8 月 20 日より 30 日まで、現地へ赴くことができ、以前に植え付けた植物の生育状態調査などを行った。教員だけではなく、今後のために学部生も1名同行し、地区営林署、植林地周辺の住民の方々、現地の学校ほかを回った。長い年月をかけて積み重ねられた信頼関係が確認できた(二宮 2023)。

4 年生 1 名が、授業料全額免除の EU 奨学金エラスムス・プラスを受給して、10 月 29 日から翌年 2 月 14 日までポーランドのポメラニアン大学へ留学し、英語・ポーランド語・社会学・心理学など 29 単位を取得した。ポメラニアン大学と自由学園は 2016 年に教育・研究活動に関する協力同意書を締結したが、新型コロナ感染症拡大の影響で昨年度まで中断していた。今年度から活動が再開できたことは何よりである。教員も咲花昭嗣准教授が 10 月 5 日から 19 日までポメラニアン大学を訪れ、ポメラニアン大学からもヴラッド(Miciński Władysław)先生が 7 月 3 日から 11 日まで来校した。

1・2 年生の生活経営研究実習は今年度もさまざまな社会への働きかけを行った。草本・潅木グループは、4 月 28 日に 4 年ぶりに「春の自然観察会」を開催した。今年は春の訪れが早かったが、普段の観察会では見られないものやその季節の変化も含めて楽しむことができた。10 月 27 日には秋の自然観察会も開催した。どちらも定員を超える約 60 名の参加者があり、「丁寧な説明で楽しく観察できた」「次回の観察会にも参加したい」などの感想をいただいた。食グループは、しののめ茶寮にて、6月 30 日、11 月 17 日、2月 20 日の 3 回にわたって学生考案ランチ・デザートを販売した。いずれも地域の方から好評を博した。

11 月 4 日、福島県二本松市で不耕起栽培に取り組む人たちが集うイベント「ライ麦畑にあつまって」が開催され、RO 農法グループの学生リーダーが教員とともに参加し、自由学園の取り組みを発表した。不耕起栽培に挑戦する多くの方々と親睦を深めた。

学部リベラルアーツは身体活動と芸術活動によってささえられていることも特徴である。2024 年 2 月上旬には、美術の受講生の作品が学部食堂に展示された。初等部の児童や保護者も見学に来てくださった。3 月 1 日から 3 日まで、西荻窪のギャラリーにて 4 年生 2 名が作品展を開催し、在学中に制作した油絵を展示し、ポストカードやステッカーなどを販売した。美大生とはひと味違った感性が好評を博した。

4 年ぶりに行われた中等科・高等科の遠足に、学部生が以前同様、引率補助として参加した。学部生の働きは、中高の責任教員から太鼓判をいただき、中高大連携に寄与した。

中高の探求と連動する学部講義「探求の学びと開発」を新規開講した。学部教員が中高の探求のゼミも受け持ち、学部生 11 名が指導補助として参画した。とくに「株式会社きみとなり」を起業した学部生 2 名(後述)は高等科生徒 6 名とともに、まなコレでステージ発表も行うなど幅広い展開を見せた。

英語科はカリキュラムを一部刷新した。1・2 年選択必修「英語応用」を「Core English」と改め、これまでテーマをもとに編成していたクラスを英語 4 技能「聴く・読む・話す・書く」のどれを特化して伸ばしたいかで選択できるようにした。また、3・4 年には専門学術目的の英語である「英語で学ぶ経済・国際政治」「英語で学ぶニュース」など開講した。また、英語の習熟度を測定するための能力テストである CASEC(キャセック)を導入し、1・2 年生は全員が、春期と秋期それぞれの期末に受験することにした。

学部はこれまで自然保全や市内へのベンチ設置など地

域と密接な関係を築いてきたが、このたびさらなる地域との関係性を模索すべく、専門家の荒昌史先生を招聘し、1 年生必修「ネイバーフッドデザイン」をご担当いただいた。荒先生はグッドデザイン賞 2016「まちにわひばりが丘」をきっかけに自由学園の近隣に住まわれている。

3.5.教育・研究内容の発信

ブログによる教育内容発信は、年間を通してコンスタントに計 130 件行った。研究・実習、教養・専門、技能・感性、ライフデザイン、学生生活・学外活動の全カテゴリーで網羅的に発信できた。Instagram フォロワー数は昨年度の同時期の 377 件から 515 件まで伸びた。昨年度に引き続き今年度も Zoom と YouTube による「学部チャンネル 730」を毎月配信した。神明久准教授監修のもと、学部生のチームが結成し、学生が主体的に運営した。ゲストを招いての対談形式で、毎回 30 名～50 名の保護者の参加があった。今年度の主なトピックスは次の通り;新入生インタビュー(4 月)、学部教員紹介(4 月から 6 月)、ネパールから生配信(8 月)、学部生の学外での活動(4 月・10 月)、学部の講義や行事の紹介(11 月・12 月)、能登半島地震被災地支援(1月)、学部生の進路特集(1 月・2 月)。視聴者から「自然で楽しい雰囲気」「次回も楽しみ」「時間をかけて心を尽くして準備することにどれほど価値があり人の心に響くかを再確認した」などの声をいただいた。

3.6.キャリア支援体制・卒業後の進路・学部生の起業

キャリア支援室は前任の退職にともなう新しい人事として金井玲奈先生を招聘した。金井先生はキャリアカウンセラーとして豊富な資格・実務経験をお持ちで、学部生のインターンシップ相談やキャリア開発にご尽力いただく。

9 月 18 日から 20 日に小堺康弘キャリア支援室長は、コロナ禍にインターンシップでお世話になった兵庫・京都・徳島の企業を訪問し、謝意を伝えるとともに、今後の拡大などの可能性を伺った。また、卒業生が各地で活躍し、地域での存在感を高めていることを確認した。

今年度の卒業生の進路について、4 年課程は昨秋の合同企業説明会で来校した 5 社から内定を得て、新規開拓先 4 社から内定を得た。1名が大学院へ進学した。2 年課程から 3 名の4年課程編入があった。また新卒の話ではないが、学部卒業後、慶應義塾大学大学院に進学していた卒業生が 3 月に学位を取得し、都内私立大学の助教へ就任し、数学者になるという夢を叶えた。

3 年生のキャリアガイダンスは、都内オフィスで業界研究ワークショップ、学部生ピッチ大会など南沢会との新たな連携、企業派遣型長期インターンシップなど、少人数であるがゆえにできることにチャレンジした。学部生ピッチ大会は、今年度 2 回開催したが、南沢会との共同企画である。初回は 7 月 1 日にしののめ茶寮にて、2 回目は 10 月 14 日にみらいかんにて開催した。

2 回目のピッチ大会では、2 名の学部生起業家が誕生した。会社名は「株式会社 きみとなり」で、学部生メンバーが前年度まで、卒業生飯渕弘成氏の経営する会社でインターンシップをしたことがきっかけであった。設立のための費用はクラウドファンディングで獲得した。学部生とスキンケア専門家が共同体となり、肌トラブルを解決するためのスキンケア製品を開発し、スキンケアメーカーとして自社の商品に関わるすべての方の個性・ひととなりを大切にすることをモットーとし、自然素材を活用しつつ活動する(渡邉 2023)。学部生による起業は自由学園の長い歴史の中でも初であり、きみとなりが学校公認となったことも相俟って、学部は大いに沸いた。

12 月 3 日の南沢会・協力会・保護者会・友の会のイベントにあわせて、卒業後 10 年の節目を迎える男子部 70 回生と女子部 90 回生を学部へお招きする最高学部ホームカミングデーを実施した。8 名の卒業生と 2 名の退職教員が参加し、紅葉美しい南澤で歓談のひとときを持った。

4.結びにかえて

自由学園最高学部がこれから目指すべき姿とは、これまで以上に教育・研究の卓越性を追求するとともに、各種学校ならではの利点を活かした、従来型の大学の枠を超える機能拡張である。それは共生共創を通して新しい社会の創造に資するプラットフォームへと進化することでもある。学内外から(年代を問わず)多くの学部入学者があり、ともに真の自由人となることを目指す。

引用文献

遠藤敏喜(2023),「鳥の目と虫の目でふりかえる 2 年間」,自由学園年報 第 26 号, https://www.jiyu.ac.jp/documents/annual_report.php

自由学園総合企画室(2010),『自由学園とは？100 問 100 答』, 自由学園出版局

二宮新(2023),「ネパールワークキャンプ活動を振り返って」, 自由学園公式ウェブサイトから最高学部 NEWS, https://www.jiyu.ac.jp/college/blog/sl/69754(2024 年 9 月 4 日公開)
羽仁もと子(1950),『羽仁もと子著作集 18 巻』より「自由学園の大学」, 婦人之友社
山田周太郎(2023),「第 6 回リベラルアーツ学会 発表者と積極的な質疑応答」, 学園新聞 第 738 号(2023 年 7・8・9 月号) p.6, 自由学園出版局
吉川慎平(2024),「2 年生 3 名が 2 級ビオトープ管理士資格試験に合格」, 自由学園公式ウェブサイトから最高学部 NEWS, https://www.jiyu.ac.jp/college/blog/ks/70365(2024 年 3 月 11 日公開)
渡邉篤子(2023),「自由学園の学生が起業に挑戦　自然素材のスキンケア商品を開発・販売　クラウドファンディングは 100 万円突破」, ひばりタイムス, https://www.skylarktimes.com/?p=43841(2023 年 12 月 13 日公開)